

寺報

善巧

発行

938 富山県下新川郡
宇奈月町浦山 4 9 7
白雪山 善巧 寺
☎宇奈月 0765(65)0055

賀正

花

御正忌報恩講

一六日	一三日	一四日	一五日	一六日
昼二時	昼一時	昼一時	昼二時	朝七時半
満座	お講	お講	お講	お講



寺ごよみ

一月

一	修正会 年頭参り
二	お寺の学校カルタ会
三	栗虫御助成
四	栗虫・報恩講



浄土に飛び交う六羽の鳥

寺報「善巧」は、この一月元旦発行の月号で五十号を迎えます。一口で五十号と申しませんが、一月一日、四月一日、七月一日、十月一日と年四回発行ですから、年数でいえば、十三年間に亘って休むことなく発行されて来たわけですから、善巧寺にも、歴史に残る色々な事がありました。その善巧寺の歴史を全門徒の方々に伝えて来たのがこの寺報です。善巧寺の新聞として、今では皆様から、親しみの心で受取って頂いているものと、発行者の側からも、自信をもつて申し上げることが出来ます。

一般の新聞は、社会の出来事を報道する役目をもっています。日刊であるし、読者はお金を払って購読しています。

寺報は、寺と門徒の間の連絡簿であり、浄土真宗の文書伝道の一翼をなすものであり、それと共に、皆さんに悦んで貰える寺からのプレゼントでもあります。私たちは、寺の新聞が、更に、百号、二百号と続くことを念願としています。

「一月のたしなみにはちかきところ御開山様の御座候ふところへまゐるべしとたしなめ」と、蓮如上人御一代記開書にある

祝 寺報「善巧」50号

ように、皆様は事あるごとに御開山様の御座候ふところである善巧寺にお詣り下さるし、私達は、寺報善巧という新聞の形となって皆様の御宅へ参らせて頂いております。

最近、情報社会といわれて、皆様の所にも毎日色々な形の刊行物がそれこそ大波のように押し寄せて来ていることと思います。新聞を開けると、広告物の山が挟まれています。パチンコ屋の広告もあれば、マクドナルドのチラシもあります。郵便箱を開けると、大事な手紙は一通、二通、あとは無用の広告物の山です。何処で調べたものか、住職の老齢化を知って、長寿の秘訣と称するもろもろの医療機械の色つき冊子まで入っています。

願わくば、お寺の新聞だけはこれらと一緒に取扱いしないで頂きたいのです。本当に、写真の一つ見て頂くだけでも、今、寺を中心に何が行われているかが分ります。ここらみに、前号四九号には、写真が三十一葉もあり、ほほえましい雪ん子の活動も、若院其の後の快復も一目瞭然です。又、善巧寺で年何回か持たれるお説教の集りを、全部テープにとって紙上に再現されます。お寺の新聞を何時までも可愛がって下さい。

住職 雪山俊之

甲 五



「本典一滌録」より 明教院の心を味わう②

信教教授 利井明弘師

明教院僧録和上の孫弟子に当ります。利井鮮妙が、宗祖親鸞聖人の六百五十回忌の折に、前回からお話しております「総序の御文」を誦誦用にしてご本山でおつとめになったことをたいへんよろこんで文章に残しておるのですが、それ以来でしようか、私たちの行信教授では、授業がはじまる前のおつとめで、必ずこの「総序の御文」をみんなで声をそろえて読むしきたりになっております。

で、この御文の最初に「ひそかにおもんみれば」とあるわけですが、前回夏にこの味わいをお話したようですので、

難思の弘誓は
難度海を度する大船

無碍の光明は
無碍の闇を破する意日なり

という一文に入らせていただき
ます。でこれは、法蔵菩薩が阿弥

陀仏となつて下さる因果と、そこへ参らせていただく衆生往生の因果が説かれてあるわけで、仏説無量寿経全二巻のおいわ

れが、この短かなお言葉の中にこめられてあるでございます。

が、私は先哲の書物等

を讀ませていただいております、思うのですが、一字一句の語句の解釈もありがたいのですが、この無量寿経に關して、なぜ上下二巻あるのかということについて、ある和上が「それは説くともつきな

まい。だから、わが両手でいいたで下さつてあるのじや。ありがた

いことじや」とおっしゃつてい

こういふ話がまた、ありがたいなあ、と思つて下さる。その大經のおいわれは、私たちに眞實そのものを与えてはどうかといふことができないか、ら、眞實のよつてきたるところ、つまり、眞實の因果をあらわして下さつてゐるわけでありまして、因だけあらわされてもまたわからないものでして、因果をあらわして下さるからうなすけるんです。たとえはね、私はお百姓さんのことあまりわかりませんが、あのイネの薬とヒエの薬と、見分けがつかぬやうな、素人ではなかなかわかりません。だけれど、果が出てくるとわかります。これは私でも

難思の弘誓は 難度海を度する大船

わかります。

いま、その因のところで説かれたのが「難思の弘誓」であります。

弘さまは私たちを救うために法蔵菩薩となつて、世自在王仏のみも

とで、私たちの帰る世界を、ま

が、いなく、このようにつくろぞ、

として、そこへ往く手だてもの

の因が衆生を度する果となるので

そう、この明教院和上の百回忌のとき、先程申しました利井鮮妙の兄の明朗が、この善巧寺に参つて導師をつとめております。で、百五十回忌のときは、ご案内がなかつたのでありますが、私のじいの興隆が参つてきまして、お庭番をして、長講一席、大演説をして、この門徒衆が感激にむせんのだといわれております。昔の人はずこいですがね。ご恩をうけた人の命日もお忘れず、明教院和上の百五十回忌に案内なくとも参つてくる。今の私たちには考えられないことであります。

で、私と父、興隆が参らせていただいたで、二百回忌の時は、弟のご縁

あります。

つて、帰りの道、父と話をしたんですが、これで、

明朗さんや、興隆じいさんに、みやげ話ができました。

したなあ、とね。

まあ、こういう話ができるというのも「難思の弘誓」が「難度海を度する」からいえることなんで

すよ。帰る世界を仕上げて下さつてあるからこそ、共に一処のところで会えるんです。そしてその手

号、南無阿弥仏なのであります。

みなさん、お浄土は西にあります

寺
ごよみ
一 日 お講・浦山
六 日 三日市・報恩講
七 日 八 日
三 日 生地・狹生・報恩講
一 四 日 一六 日 お講・下立
一 七 日 音沢御助成
二 〇 日 二 日 下立・報恩講
二 三 日 舟見・報恩講
二 四 日 入善・泊・報恩講
二 七 日 析屋・熊野・報恩講

すよ。こんなことという、ほんとやろかという人があつたが、私はあの量鸞大師が西方浄土を指して下さつたからこそ、東や、南や、北の欲の行列になつてゐる自分の氣付かされるんではないか、浄土がどこにあるかもわからん、眞実に背を向けて、欲と二人連れであつちの行列、こちの行列にならぶわたしたち、だからこそ、「難思の弘誓」が「無碍の光明」の念仏となり、「無碍の闇を破する意日」とはたつき「難度海を度する大船」となつてこの私をお救い下さるのであります。仏様やお浄土に背を向けてゐる私たちを、逃げるものを追いかけるがごとく、抱きとめて下さるのが、阿弥陀さまなのであります。

御正忌

弘長二年（二六二年）十一月二十八日（新暦では一月十六日）にご往生なされた親鸞上人の御祥月命日の法要のこと。

御絵伝拝見

親鸞上人のご生涯を絵巻物にしたもので、御正忌報恩講に本堂余間にかかげます。善巧寺の御絵伝は寛政八年（一七九六）五月十八日に下付されたもの。

上巻第一段 出家学道

聖人九歳の春（義和元年・一一八一）のころ、養父、範綱卿と共に、前大僧正、慈円慈鎮和尚の貴坊へ具したてまつりて鬘髪を剃除したまいき。それよりこの方しは南岳・天台の玄風を訪ひて、ひろく三観仏乗の理に達す。



第二段 吉水入室

建仁第一の暦（一一〇一）春のころ、上人二十九歳、隠遁の志にひかれて、源空聖人の吉水の禪房にたづねまいりたまいき。これすなはち世くだり、人つたなくして難行の小路迷いやすきによりて、易行の大道におもむかんとなり。



第三段 六角夢想

建仁三年（一一〇三）上人、夢想の告げにましましき。六角堂の救世菩薩、顔容端嚴の聖僧の形を再現して白衲の袈裟を着せしめ、広大の白蓮華に端座して、上人に告命してのたまわく「行者宿報設女犯、我成玉女自被犯！」



第四段 蓮位夢想

建長八年（一二五六）二月九日の夜、釈蓮位夢想の告げにいわく、聖徳太子、親鸞上人を礼したてまつりてのたまわく「敬礼大慈阿弥陀仏、為妙教流通来生者 五濁悪時悪世界中 決定即得無上覚也」。



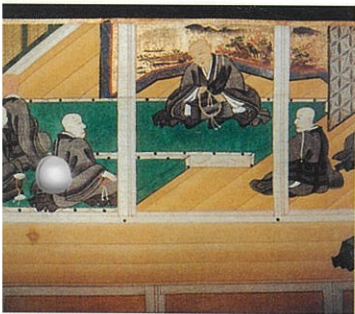
第五段 選択付属

愚禿釈鸞、建仁辛酉の暦、推行をすてて本願に帰し、元久の年（一二〇五）恩恵を蒙りて「選択集」を書く。おなじき年の初夏中旬第四日「選択本願念仏集」の内題の字等、源空聖人真筆をもって書かしたまふ。



第六段 信行両座

親鸞上人のたまわく。「今日信不退、行不退の御座を両方にわかたるべきなり、いずれの座につきたまうべしとも、おのおの示したまへ」と。三百余人の門侶みなその意を得ざる気あり。ときに沙弥法力遅参して「法力も信不退の座にまいるべし」と。



第八段 入西鑑察

御弟子入西房の親鸞上人の真影を写したてまつらんとこのころざしをかみて、定禪法橋を召請す。定禪、尊顔に向いていわく「去夜夢のうちに拝したてまつるところの聖僧の面像、いま向かいたてまつる容貌にすこしもたがわず」と。



第二段 稻田興法

聖人越後国より常陸国に越えて笠間郡稲田郷というところに隠居したまふ。道俗あたとをたずね蓬戸を閉すといえども貴賤またにあふる。仏法弘通の本懐ここに成就し、衆生利益の宿念たちまちに満す。



善巧寺法物御絵伝

寛政八年（一七九六）製

願主慶恩



一人の山伏、仏法にあだをなしつつ、聖人の禅室にゆきてたずね申すに、上人左右なく出であいたまいけり。すなわち尊顔にむかいたてまつるに、害心たちまちに消滅して、後悔の涙禁じがたし。柿の衣をあらため仏教に帰す。

第三段 弁円済度



第七段 信心諍論

「源空聖人の御信心と親鸞が信心と、いささかもかわるところあるべからず、ただひとつなり」と申したりしに、ひとびとがめていわく「善信房の、聖人の御信心とひとしと申さるることいわれなしいかでかひとしかるべき」と。

第四段 箱根霊告

聖人関東を出でて、京都におもむきましましけり。ある夜、箱根の嶮にかかると、翁のうるわしく装束したるがでて、夢にもあらざうつつにもあらず、権現迎せられていわく「いまわれ尊敬すべき客人來たる。丁寧に饗応すべし」と。



第五段 熊野霊告

平太郎ながしという庶民あり。熊野に参詣すべしとて聖人にたずねもすに「熊野権現の本地すなわち阿弥陀仏なり」と。これにより平太郎熊野に参詣す。征誠殿の扉をおしひらきてみれば、聖人こつ然としてまみえたまふ。



下巻第一段 師資遷謫

主上臣下法に背き義に違し、いかりをなしあだを結ぶ。これによりて真宗興隆の太祖源空法師ならびに門徒数輩、罪科を考えず、みだりがわしく死罪につみす。あるいは遠流に処す。予はその一つなり。しかれば僧に非ず俗に非ず。



第七段 廟堂創立

文永九年（一二七二）冬のころ、東山西のふもと、鳥部野の北大谷の墳墓をあらためて、おなじきふもとよりな西、吉水北の辺に遺骨を掘り渡して仏閣を立て影像を安す。聖人相伝の宗義いよいよ興す。



第六段 洛陽遷化

聖人弘長二歳（一一六二）仲冬下旬（十一月下旬）の候より、いささか不例の氣まします。それよりこの方口に世事をまじえず、ただ仏恩のふかきことをのぶ。おなじき第八日、頭北面西右脇に臥し、ついに念仏の息たえおわりぬ。





県子供フェスティバル大賞

54年11月25日 劇団創立
55年3月25日 富山別院で初舞台
4月29日 善巧寺で旗揚げ公演
8月9日 浦山保育所公演
8月30日 中央公民館初公演
9月15日 敬老の日招待出演
11月2日 町文化祭参加
12月21日 富山公会堂で公演
56年3月28日 第一回定期公演
6月28日 町青年祭参加
8月30日 第二回定期公演
9月13日 子供フェスティバルに出演。奨励賞
10月31日 町文化祭参加



初演 別院で

60年3月31日 第九回定期公演
6月17日 町青年祭参加
8月22日 第一回こどものための舞台芸術大祭
10月21日 町文化祭参加
10月28日 町文化祭参加
8月26日 県子供フェスティバル参加
8月5日 第八回定期公演
6月17日 入善青年祭出演
5月27日 別院百周年大会
3月31日 第七回定期公演
10月23日 県子供フェスティバル参加
10月26日 富山日校大会出演



新世紀博野外劇場

58年3月26日 第五回定期公演
7月10日 町青年祭参加
7月23日 新世紀博出演
8月28日 第六回定期公演
11月14日 新湊文化会館公演
10月10日 子供フェスティバル参加。大賞受賞
9月13日 黒部ライオンズクラブ表彰
8月28日 第四回定期公演
6月27日 町青年祭参加
12月6日 第三回定期公演
11月15日 郡町公民館連表彰
57年3月28日 第三回定期公演



名古屋公演

8月24日 第十二回定期公演
10月26日 県子供フェスティバル参加
10月26日 町文化祭参加

61年3月25日 富山日校大会出演
3月30日 第十一回定期公演
5月29日 防犯協会表彰
7月29日 全国園長会(五箇山)で公演
8月3日 名古屋公演
8月23日 砺波北部小公演



佐渡公演

8月25日 典(佐渡)参加
11月10日 第十回定期公演
県子供フェスティバル参加

公演回数 六十九回
上演本数 百三十三本
観客動員 五万九千九百人

10月23日 県子供フェスティバル参加
11月3日 富山藤ノ木小公演
11月12日 黒部三日市小公演
11月20日 砺波東部小公演
11月27日 黒部若栗小公演
12月18日 県児童大会出演



地域社会賞

63年2月28日 善意銀行県大会
3月27日 第十五回定期公演
7月10日 北陸仏壮大会公演
8月28日 第十六回定期公演
12月20日 富山・広田小公演
11月13日 県年末児童大会
11月3日 北日本地域社会賞
10月1日 町福祉協議会表彰
9月6日 両小でダブル公演
8月23日 砺波・鷹巣、庄南
7月12日 第十四回定期公演
6月14日 町青年祭参加
6月14日 黒部JC招待出演
12月14日 滑川子供大会公演
12月14日 第十三回定期公演
12月7日 招待公演
11月2日 町文化功労賞
12月7日 高岡スポーツ大会に

テンテコ雪ん子

秋冬引っぱりダコ



県の児童大会(12.18)

雪ん子劇団は十周年を迎えて、大いに活躍。この一年間の公演回数は十一回。また、劇団五年生の子が作文コンクールに雪ん子の事を書いて入賞したり、年末にはアフリカの難民救済の街頭募金をしたりと、ほんとうによくやってくれます。

雪ん子劇団は右ページでご覧のように昭和五十四年十一月二十五日に創立し、十回目の記念日を迎えたばかり。この一年、二月の善意銀行県大会にはじまって、三月



10周年のお祝い会(12.18)

には定期公演、七月に仏大会、八月に夏の公演。そして秋冬は毎週のようには毎週のようには公演がつまり、テンテコ舞い

すものね。十二日が黒部の三日市幼稚園と小学校の観劇会へ。二十日は砺波東部小学校。砺波は毎年うかがうんですが、とにかく見て下がる側の子供も大人もじつにすばらしい。文化程度が違うといつてもいいでしょう。とにかく雪ん子の一番小さな声の子のセリフが二十人の子の大講堂の一番うしろまで聞こえるんです。それほど静かに見て、終わったら家に帰って家族でその日の劇のことを話し合い、おまけに親子で作文まで書いて下さるといふ徹底ぶり。



年末街頭募金(12.17)

富山本願寺の主催で毎年やるんですが十二月十七日、きびしい寒さの中、大声をはりあげて、黒部のメルシー前でがんばってくれました。そして、年末は街頭募金。

ほんとに見習わなくてはいけないと思います。二十七日は黒部の若栗小学校。そして十二月十八日は県の児童大会へと、よくがんばりました。ごほうびにこの日は、夢を育てる会のお父さんお母さんやOBのみなさんと一緒に、十周年の記念のささやかなパーティが催されました。

十二月十一日 日曜
忙しい一日だった。

午前九時、音沢から三人。三十五日法要。手帳を見ると「十一月九日九時半、音沢葬式、快晴」とある。あの日は、午後発願寺の報恩講へ行くため時間を早めて貰ったのだ。そんなことから、葬式の家が音沢で最後まで昔の儘の囲炉裏が切ったこと、亡くなった爺さんが一生懸命はえをくべて報恩講廻りに来た私達を欲待して下さったことなど思い出して、お勤めの間に亡き仏の姿がちらちらする。

十時過ぎ、浦山新から仏様迎える一行が来て、往観偈をあげる。十一時より下村の法事。昭和六



住職日記

十一月十二月十五日寂の父親の三回忌。若い息子が昨日から記念品の包みやら仕出屋への注文に、何度か寺へ足を運んでいた。参詣者男女二十名。終って広間にお膳を並べて私達もお相伴になる。十二時半、下立より四人。父親の二十七回忌である。観經一卷。中年を越した男女四名。親の法要に集って寺の一室で昔を語る風情は、趣きがあったてほえましい。何でも胃がんで亡くなったのが七十六歳。当人には知らせてなかったが、うすうす感付いていたらしい。胃の薬をあっちこちから集めて飲んでいたら、話し

合い、次の三十三回忌には、又、集まりましようと言って帰って行く。次は三時からの苦だから書齋に入って一服。朝からの冷雨が続いている。庭木の雪つりは先日終わったばかりだが、今朝の風で杉の落葉が散乱して見苦しい。二時四十分、車にて浦山新に向う。四通八達の言葉通り、此処数年、あちこちに新道が作られあつという間に法事のお宅に着く。主人夫婦に迎えられて、控の間で御茶を頂く。去年亡くなられたおばあさんの一周忌である。

此の家は最近の建築だが、御主人の心遣いが設計の各所に配られて、三幅のほとけさまを掛け、仏前を荘厳し、四人の僧侶、参詣の衆と一座に会しても、如何にも法要の座という雰囲気が出来上っている。三奉請・表白・観經・念仏・和讃と式次第が終り、例の如く十四、五分の説教をする。料理の膳が並ぶ頃には暗くなっている。故人を語り合ううちに五時が過ぎ、帰りの車に乗る。お土産に柚子を頂く。入浴、就床九時。

寺
ごよみ
三月

- | | |
|----|------------|
| 一日 | お講・浦山 |
| 二日 | 浦山・報恩講 |
| 三日 | 浦山・報恩講 |
| 四日 | 浦山・報恩講 |
| 五日 | 太子会 |
| 六日 | 富山・報恩講 |
| 七日 | お講・析沢 |
| 八日 | 総代会 |
| 九日 | 雪ん子劇団十周年公演 |

貼り付きし 銀杏落葉や
雨参道
墓守りの 小春日の掌の
ぬくみかな

ほほえみにかがやく命
なみだにも
くもらぬ命
たたえまつらん

Let us praise life
that shines in a smile,
life that is unclouded in tears.



今年もよろしく



一月一日午前零時ちやうどに、善巧寺の鐘が、ゴーンと鳴りわたって、新しい年を迎えました。おめでとうございます。本年もよろしくお願いします。本堂の阿弥陀さまにごあいさつをなさった初参りの方々が、集会所に顔を見せられ、年頭のあいさつをかわしながら、新酒とおせちをいただく、右のカレンダーとこの寺報を手になれる。いよいよ寺の新年の幕あけです。門信徒の皆様、本堂に今年もお健やかに、お念仏ご相続下さいますように...

一月十三日より十六日まで
正忌報恩講
布教 当山若院

年頭告知板

お誕生祝い お寺では明治大正生まれの方々に、お誕生日のお祝いの便りを差しあげております。小冊子とお祝いのメッセージですが、みなさんにとってもよろこんでいただいています。

もうだいぶつづけているのですが、それでもまだ名簿のつけ落としなどがあるようです。明治大正生まれの方で、まだ誕生日にお祝いが届かない方がありましたら、ご一報下さいますように...

新築祝い 新しいお家が建ったとき、昔はお寺からナベなどを贈っていました。いまは、六字のお名号か、住職の色紙をお贈りし

善巧寺の常例行事

お寺の学校講	毎月 一日・十六日
雪ん子劇団	毎月 第四土曜日
夢の会	毎週 月曜四時
花の会	毎月 第二土曜日
お経の会	毎月 第一・第三土曜日

見るお経



美しく、わかりやすい

仏典物語第八巻
『パンタカ経』 本手の書
文芸春秋社
企画・制作 本願寺 海老田光弘
永倉在道スベシヤルバツケイジ入り
2月1日発売

合 掌

ています。遠慮なしにお知らせ下さい。
結婚祝い 新婚さん、おめでとう！お寺からもお祝いさせて下さい。若院の手づくりの焼物と懐中名号をプレゼントいたします。
成人、入学、入社祝い お知らせせされば、お寺から記念品を贈らせていただきます。

うれしい事は、多くの人たちとよろこんだほうが、いいんじゃないでしょうか。一人の喜びも二人で喜べば二倍に、十人で祝えば十倍にふえると思います。悲しい時や、苦しい時ばかりでなく、うれしいとき、楽しい時にもお寺へどうぞ。

五十二年一月一日に産声をあげた寺報「善巧」が、今回で五十号を迎えました。十二年間、一、四、七、十月と年四回、休まず発行することができましたのも、門信徒の皆様様の暖かいご支援のためです。有難うございます。

ページ数にして今号までで三五三ページ。記事本数六九二本。写真の掲載枚数はなんと一二七〇枚にのびります。これは、そのままわたしたちの寺、善巧寺の歴史を刻んだ、貴重な生の過去帳です。それと同時に、寺報「善巧」は寺と門信徒を結ぶ、強力な念仏の教化伝道の情報紙でもあります。

五五〇の門信徒の方にはもちろん、遠く九州、中国、関西、関東など全国の御同朋にも広く親しまれ、現在の発行部数は一二〇〇部。一寺院の寺報としては、部数内容ともに最高のものではないかと手前勝手に思っています。

「如来のメッセージをあなたに」——文学者の住職とジャーナリストの若院のコンビでこれからもがんばります。ご愛読下さい。

